

「同伴勤務」 介助犬とともに働く

山口亜紀彦さん（千葉市職員）





山口亜紀彦さん。「周囲の多くの人の応援で、オリーブと一緒に働き、生活できてうれしいです。これからもっと、介助犬の普及と理解が広がってほしい。また、それぞれの障害に合った介助犬の育成も大切だと思います」



介助犬オリーブ



千葉市花見川区役所市民課。戸籍、住民票の交付等、市民が最も多く訪れる忙しい部署だ



千葉市花見川区役所の朝、職員たちが出勤してくる。車いすにのった山口亜紀彦さん(三二歳)も、介助犬を伴って出勤してきた。

「オリーブ、おはよう」
同僚職員から声がかかる。オリーブはうれしそうに尾をふって応えながら、山口さんの先に立つて、職場のデスクへ向かっていく。

千葉市職員の山口さんは、一三歳の時、交通事故で脊髄を損傷し、下半身がまひして車いすでの生活を送っている。事故後、入院とリハビリ生活を一年、さらに職業訓練校で二年間学んだ後、一九九九年四月、千葉市職員として採用され、同市花見川区役所市民課に勤務していた(注1)。

山口さんは、障害の影響で、発熱するなど、よく体調をくずすことがある。そんな時は、常時水分補給をして、新陳代謝をよくする必要があるが、一人住まいで不自由な身体では、冷蔵庫の水を取りに行くことさえできず、つらく、恐い思いを何度も経験した。

そんな時、介助犬シンシアと生活する木村佳友さん(玉塚市)のことを知り、すぐに介助犬協会に登録をした(九八年十月)。その一年後、パートナー候補の犬が見つかったが、当時、職場では同伴勤務の理解を得るまでに至らず、あきらめざるをえなかった。

二〇〇一年六月、「オリーブ」(ラブラドル・レトリバー)が候補犬として見つかり、再度、同伴勤務を市に要請した。

市側は「役所には、不特定多数の人が訪れ、その中には犬の苦手な人もいる」と難色を示したが、当時、介助犬、盲導犬等の法的な整備(身体障害者補助犬法)(注2)が進められていたこともあり、山口さんの要望に応え、関係部署と協議するなどして、同年十月、同伴訓練の実施を認めた。山口さんとオリーブとの訓練は自宅で五〇日、職場で五カ月半行われ、〇二年二月、介助犬協会からの認定も受け、同年五月、市からの正式許可があった。全国の自治体で初の介助犬との「同伴勤務」が誕生した。

注1 山口さんは、'03年4月から千葉市障害者相談センターで勤務されています。

注2 '02年10月1日より施行。盲導犬、介助犬、聴導犬の3種について、公共施設、デパート、スーパー、ホテル、飲食店など、多くの人の利用する場で、同伴を拒んではならない、というのが主旨。



介助の必要がない時は、静かに、山口さんのデスク下で待機している



デスクから落ちた封筒を拾って、山口さんに渡す



身体障害者補助犬法のポスター（花見川区役所で）



今日の仕事は終わった。「さあ、おうちへ帰ろう」



同僚とのおしゃべりの輪にも参加(?)するオリブ。「実際に導入してみたら、考えていたほど問題はないです。市民からの苦情などありません」と同僚たちも温かく見守っている



庁内を移動する時も一緒

●千葉市障害者相談センター

〒260-0844 千葉市中央区千葉寺町1208-2 千葉市ハーモニープラザ1階 TEL 043-209-8823 FAX 043-209-8826



携帯電話が鳴った。口にくわえて山口さんのもとへ



インターホンが鳴ると、受話機をはずし、山口さんの対応を待つ



「オリーブ、〇〇を取ってきて」と指示を出す山口さん（千葉市の自宅で）。
現在、オリーブの主な介助の仕事は、①リモコン・携帯電話など、物を持ってくる、②物を拾う、③インターホンに対応する、④急なスロープ、段差で車いすを引っぱる、⑤車いすを持ってくる、⑥車いすの乗り降りの支点になる、⑦生ゴミ等、物を運ぶなど



山口さんの命令で冷蔵庫のドアを開け、ペットボトルを取り出し、再びドアを閉めてから届けるオリーブ。この訓練には半年かかった。「ありがとう」とほめることが大切だという



自宅近くのレストランで夕食をとる山口さん。オリーブも常連だ



「さあ、おやすみ。今日1日、お仕事ごろうさん」とオリーブに感謝のことばをかける山口さん（自宅で）